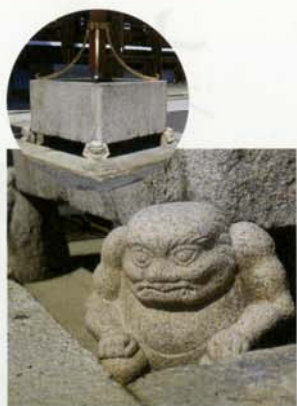


六 見残しの石

御影堂門前にある石橋の南側の欄干から南へ10mほど歩き、西に目を落とすと、石垣に「◎」と刻み込まれた石があります。これが「見残しの石」です。その昔、大坂・石山本願寺には、薩摩藩主・島津家の定紋、○に十の字が刻まれた石がたくさんありました。石山合戦の講和(1580年)の後、いったん薩摩へ持ち帰り、その後、本願寺が現在の七条堀川へ移転するにともない、またこれらの石を京都へ運び、石垣を築いたそうです。戦国末期から明治初期にかけての約300年間、薩摩藩では真宗の念仏禁制を敷いていたため、本山の石垣に刻んだ紋が薩摩藩に知られることを恐れ、削りとられたそうです。けれどなぜか一つだけ残ったのがこの石でした。見落としたのではなく、実は意図的に目立つところの一つだけ残し、念仏禁制の弾圧にもめげず、み教えを伝えていることを、門信徒に示したのだともいわれます。そのため「印」ではなく、「◎」とし、薩摩藩に知られても「ただの印」だとしたのだそうです。



四 天の邪鬼

御影堂正面の左右二箇所にある天水受けは、各4人、計8人の天の邪鬼に支えられています。身長38cm、顔15cmというほぼ二頭身のずんぐりとした姿が特徴です。膝に手をつく者、胸の前で手を合わせたり、ゲンコツをつくる者、顎に手をやる者など姿はまちまちで愛嬌たっぷり。御影堂が再建された1636年(寛永13)から約370年、ずっと天水受けを支え続けてきました。世間では、天の邪鬼は偏屈者などと思われていますが、「仏説無量寿経」にある「法雨」のように雨水が流れ集まる天水受けを支える本願寺の天の邪鬼は、み教えを守り伝える存在と見ることができます。

五 逆さイチョウ

御影堂門を入ると正面に、横に広がる大木が目に入ります。これは、イチョウの木ですが、本来なら空に向かって伸びるところ、枝が横に伸びていることから、「逆さイチョウ」と呼ばれ親しまれてきました。この木は、天明の大火の際に、水を噴いて火をくい止め、御影堂、阿弥陀堂の両堂を守ったといわれます。そこで別名「水噴きのイチョウ」とも呼ばれ、「本山の不思議」のひとつに数えられています。けれど、実際に水を噴いたのではなく、あくまで伝説。



世界遺産にもなっている本願寺の境内には、国宝や重要文化財に指定される建物や庭など、見所も豊富。そんななか「本山の不思議」として知られるスポットも多数存在します。参拝に訪れた際に、これらのおもしろスポットを訪ねて本願寺の奥深さを実感してください。



【参拝志納部】
おつとめ、拝敬式の申し込み、大遠忌法要のご懇志の受付、ご本尊など免物の受付を行います。

【開門時間】
5時30分
お昼前は6時から動きます。

マップ 本願寺



三 梵鐘

午前5時半になると、「ゴーン」という梵鐘の音が響き渡ります。と同時に御影堂門、阿弥陀堂門が開かれ、「おあさじ参拝」に訪れた人々が境内に足を踏み入れるのです。このように、梵鐘は寺院においては、おつとめがあることを広く伝えるために撞き鳴らされるもので、「集會鐘」とも呼ばれます。本山の鐘樓は、国宝・飛雲閣のある滴翠園の東北隅にある重要文化財です。初代の鐘は、京都・太秦の広隆寺から1600年頃に買い取ったと伝えられています。表面には、銘など漢字が412字、経文とおぼしき梵字が420字刻み込まれているそうです。その梵鐘は平成8年に役目を終えて安徳殿支間横に保存され、現在の梵鐘は、2代目です。



一 杵石

杵石とは、柱または縁の束柱を受けるために用いる「石」で、根石、あるいは柱石ともいわれます。現在では天然石の代りにコンクリートが用いられる場合が多いようです。けれど、御影堂の杵石は、石ではなく木、ですが、木の隙間から中を覗くと、中身が石であることがわかります。なぜ、石を木で覆ってあるのでしょうか。ざくろの木で造られた杵石を、江戸時代末期の1861年(文久元)に、親鸞聖人600回大遠忌を迎えるにあたって取替える修理が行われた際、木ではまた腐る可能性があるとして石が用いられたそうです。その時、昔の面影を残そうと、表面を木で覆ったのだといわれています。



二 太鼓楼

本山境内の東北隅にある建物で、かつて何に使われていたかは、一般的には知られていません。実は、この建物は太鼓を設置する太鼓楼だったので、当時太鼓は、時刻を告げたり、お説教の始まる時間を六条界隈の人たちに知らせる大切な役割を担っていました。けれど、時計の普及とともに使われなくなり、ついには引退を余儀なくされました。ところが、引退した大小2つの太鼓は、今もこの太鼓楼で静かに眠っています。大きい太鼓は直径120cm。第12代准如上人の時代に、金宝寺というお寺から寄進されたもの。そして小さい太鼓は、直径115cm。桐がツツジの木で造られた大変珍しい太鼓です。太鼓楼とそのとりにあった北集會所は、幕末、新撰組が壬生の屯所を引き払った後に移った場所でもありました。隊士たちは、ここで寝起きをし、勤王の志士たちとの戦いに挑んだのでした。ある者は討ち死にし、またある者は京都を離れていったなか、ただ一人、ここに残った新撰組の隊士がいたそうです。その隊士は、終生ここでお念仏を称え、太鼓番として生を終えたと伝えられています。

【ブックセンター】
平日は9時から17時、土日は9時から15時30分までオープン。インターネットからも注文できます。
<http://hongwanji-shuppan.com/>

【喫茶・茶室】
7時30分から17時。

【物販・法輪】
8時45分から17時。